

聖書：創世記 36：1～37：1

説教題：エサウの歴史

日時：2024年4月21日（朝拝）

今日の箇所を読んで皆さんはどう思われたでしょうか。「今日は大変な箇所になってしまった。これからカタカナの名前の細かい意味について一つ一つ聞かされる恐ろしい時間になるのだろうか」と心配していらっしゃるでしょうか。私もここから一体何が言えるだろうかと少し心配しました。講解説教でなければ、こういう箇所は取り上げませんが、講解説教をする限り、パスするわけには行きません。しかし改めて考えてみれば聖書に意味のない箇所は一つもありません。今日の箇所もこれだけのスペースを割いて書かれているわけですから当然きちんとした意味があるのでしょうか。強いられてではありますが、この箇所にも目を留めて、ここにあるメッセージを探って行ければと思います。

さて創世記は「これは〇〇の歴史である」という見出しを持って、いくつかの部分に区切られています。前回最後の 35 章 29 節にはイサクの死と葬りが記されました。それは 25 章 19 節から始まった「これはアブラハムの子イサクの歴史である」という部分の最後の言葉でした。「イサクの歴史」の後には、その子どもたちの歴史が記されます。これまでもそうだったように、その場合、神の契約を担うのではない側の歴史がまず簡単に記されます。その後で神の契約を担う側の歴史が記されるというパターンになっています。ですからまず兄エサウの歴史が 36 章で簡単に記され、その後、37 章 2 節以降で神の約束を担う弟ヤコブの歴史が長く、詳しく記されます。今日の 36 章はそのような位置づけにあります。

この創世記 36 章の「エサウの歴史」を一読して分かることは何でしょうか。それはエサウと彼の子孫は大いに祝福されたということではないでしょうか。エサウが経済的に豊かであったことは、以前読んだ 33 章 9 節にも記されていました。ヤコブが兄エサウと再会した時、たくさんの贈り物を差し出しましたが、エサウはその時、ヤコブにこう言いました。「私には十分ある。弟よ、あなたのものは、あなたのものにしておきなさい。」今日の箇所の 7 節にも所有物が多かったと記されています。そして財ばかりでなく、子孫を得ることにおいても祝福されました。まず 2～3 節にはエサウと結婚した 3 人の妻たちの名が記されています。すなわちヒタイト人エロンの

娘アダ、ヒビ人ツイブオンの娘アナの娘オホリバマ、それにイシュマエルの娘でネバヨテの妹バセマテです。これら三人の妻たちから5人の息子たちが生まれました。その名前が4～5節に記されています。アダはエリファズを産み、バセマテはレウエルを産み、オホリバマはエウシュ、ヤラム、コラを産みました。そしてその子どもたちから生まれたさらなる子どもたち、つまりエサウの孫にあたる者たちの名前が10～14節に書かれています。11節を見るとエリファズからはテマン、オマル、ツェフォ、ガタム、ケナズ、そして側女のティムナを通してアマレクと合計6人。13節にある通り、レウエルからはナハテ、ゼラフ、シャンマ、ミザの4人。そして14節にはオホリバマからエウシュ、ヤラム、コラが生まれたとありますが、これは5節と同じです。彼らには子どもが生まれなかったのか、あるいは結婚や出産の時期が他の者たちと大きくずれて世代が異なっているためか、その名前はここにありません。ここまでをまとめると、エサウからは5人の子どもたちが生まれ、そこから少なくとも10人の孫たちが生まれたこととなります。合わせて15人の息子たちと孫たちにエサウは囲まれて生活したのです。

さらにその15人の息子たち、孫たちの多くは首長となり、自分たちの部族を持つようになりました。15～19節に記されている首長たちの名は、ほとんど今見たエサウの孫たちのリストと同じです。たとえば15節を見ると「エサウの子で首長は次のとおり。エサウの長子エリファズの子では、首長テマン、首長オマル、首長ツェフォ、首長ケナズ」とありますが、これは11節に出て来たエリファズの子ら、テマン、オマル、ツェフォ、ケナズと同じです。16節最初の「首長コラ」については身元がはっきりしませんが、その後のガタム、アマレクもエリファズの子として前に出て来た人物と同一です。17節にはレウエルから出た首長としてナハテ、ゼラフ、シャンマ、ミザとありますが、これは13節のリストと全く同じです。18節にはオホリバマから出た首長としてエウシュ、ヤラム、コラとありますが、これは14節のリストと同じです。こうしてエサウの15人の子どもたちと孫たちから14人の首長たちが誕生しました。彼らはそれぞれ自分の部族を形成するほどに繁栄したのです。

次の20～30節にかけては、この地の住民フリ人セイルの子どもたちの名が記されています。このフリ人について申命記2章12節は次のように述べています。「セイルには以前フリ人が住んでいたが、エサウの子孫がこれを追い払い、これを根絶やしにし、彼らに代わって住むようになった。ちょうど、イスラエルが主の下さった所有地

に対してしたようにである。」つまりフリ人とはエサウが来る前にこの地に住んでいた先住民であり、エサウとその子孫に征服された民族であるということです。彼らは根絶やしにされたと今の箇所にはありましたが、実際には生き残りが存在し、エサウすなわちエドムの支配下に組み込まれる形となったことをこの 36 章の記録は語っていると思われます。ですからこれもエサウの子孫がいかに強大な国民となり、他の民族を圧倒し、自分たちの支配を広げて行ったかを物語る記録となっています。

31～39 節にはエドムの王たちの名がリストアップされています。ここには 1 節に一人ずつ合計 8 人の名が記されています。これを見ると世襲制ではなく、色々な土地から新しい王が誕生したことが分かります。これはいくつもの部族をまとめる連邦国家のようなものが誕生し、その上に王が立ったことを意味しているのでしょうか。イスラエルよりも早く、このような王国がエドムには誕生したのです。そして最後 40～42 節にはまだ記されていない他の首長たちの名が付録として記されています。こうして創世記 36 章はエサウの子孫がどれだけ祝福され、地上に増え広がって行ったかを示す記録となっています。

しかしです。この箇所が語っていることはそれだけでしょうか。一通り読んで、確かに彼とその子孫が豊かに祝福されたことは分かりますが、重要な何かが欠けていることを私たちは思わざるを得ないのではないのでしょうか。それは何と言っても「神」という要素です。ここには「神との交わり」とか「神との格闘」とか「神への飢え渴き」といったものが少しもありません。系図だから当たり前と思うかもしれませんが、これまでの系図はそうではありませんでした。たとえば創世記 4 章ではアダムの子ども内、神の約束を担わないカインの系図が先に記されましたが、そこにはカインの子孫のレメクが次のように豪語したことが記されていました。「私は一人の男を、私が受ける傷のために殺す。一人の子どもを、私が受ける打ち傷のために。カインに七倍の復讐があるなら、レメクには七十七倍。」一方、アダムの子で神の約束を担うセツの子孫について、その後の 5 章に系図が載っていますが、そこにはエノクが登場し、系図はまだ途中なのに、次の言葉が添えられていました。5 章 24 節：「エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。」このように一見無味乾燥と思われる系図のあちこちに、実は見落とすことのできないいくつかのコメントが付されているのを私たちは見ます。それは今日の箇所にもあるのではないのでしょうか。

その一つは2節です。そこにエサウは「カナンの女の中から妻を迎えた」とあります。ここにいきなりショッキングな言葉があります。エサウの結婚はすでに26章最後の部分に記されていました。アブラハムは周りに住む異教のカナン人からイサクの妻をめとってはならないとし、嫁探しのためにしもべを遠い自分の生まれ故郷に遣わしました。そのようにして結婚した父イサクの下に生まれたのに、エサウはあっさり周りに住むカナン人から妻を迎えました。しかも二人です。この妻たちはイサクとリベカにとって悩みの種になったと26章35節に記されていました。異教的価値観や習慣がこの家に持ち込まれることによって、何とも言えない苦み、悩みが家の中に生じるようになったのです。エサウはこのカナン人の妻たちを父イサクは気に入らないようだと感じ、その後でイシュマエル人から3人目の妻を迎えましたが、これも彼が靈的感覚に欠ける人であったこと、あまりにも浅はかな人であったことを物語るものでした。そのことがこの系図に改めて書き留められています。いくらこの後の系図が人間的に輝かしいもののように見えても、スタートがこれでは真の意味で神から祝福を受けた記録と言えるのだろうかと思わざるを得ません。

もう一つは6節です。そこに「エサウは、その妻たち、息子と娘たち、その家のすべての者、その群れとすべての家畜、カナンの地で得た全財産を携え、弟ヤコブから離れて別の地へ行った」とあります。7節を見ると「一緒に住むには所有する物が多すぎて、彼らの群れのために寄留していた地は、彼らを支えることができなかったのである」とあり、エサウが相手に譲る気前のいい人であるようにも読めます。しかし神の約束の地から離れて何の良いことがあるのでしょうか。彼としてはここに無理してとどまらなくても、もっと広い地へ出て行き、そこで自由に、より豊かに生活する方が良いと考えたのでしょうか。かつてのロトが思い出されます。しかしこのカナンの地を離れることは神と神の祝福から自分を切り離すことを意味するのではないのでしょうか。神がいなくても私は自分の人生をやって行けると考えて彼は神から離れて行ったのです。私たちもし社会的、経済的、この世的な祝福に心を奪われて、神の御言葉にとどまる生活から少しでも離れるなら、それはエサウと同じ道を行くことになります。そんなエサウがどんなにこの世で祝福されたとしても、それは地上的、一時的なものに過ぎず、間もなく過ぎ去るものでしかないことを私たちは思わずにられません。

このようなエサウと対照的なのが37章1節のヤコブについての記述です。37章2

節に「これはヤコブの歴史である」とあり、そこから新しいセクションが始まります。ですから 37 章 1 節は 36 章のエサウの歴史とセットで読まれるべきであることとなります。そしてこれは 36 章のエサウの歴史をどのように読むべきか、その大切な視点を私たちに提供してくれるものとなっています。

このヤコブについてここに彼は「カナンの地に住んでいた」とあります。これは明らかにエサウと対照的です。ヤコブはもともと霊的祝福をより高く考え、それを求める人でした。25 章で見たように、彼は神の祝福とセットになった長子の権利が欲しくて、自分が食べるために準備したスープと喜んで交換する人でした。エサウは長子の権利など今の私に何になろうと言って、これを軽蔑しました。ヤコブは神の祝福こそすべてに勝って求める人でした。そんな彼は神の約束に従ってカナンの地にとどまりました。神の御言葉を大切に考えて約束の中にとどまり続けました。

またその生活は父と同様、寄留者生活であったことも記されています。父とはイサクのことです。さらにその父であるアブラハムも同じです。アブラハムもイサクもカナンの地を与えると主から約束されながら、彼らの時代にそれは実現しませんでした。寄留者という弱い身分のまま、テント生活を続けました。そんな父の姿を見ながら、3 代目となるヤコブはなおも父と同様、寄留者生活を続けたというのです。エサウとはかなり異なります。しかもこれからの色々あります。この後しばらくカナンで生活した後、神の導きにより、エジプトへ下ることになります。そこで奴隷となり、大変な苦しみを受けます。ふと横に目をやればエサウの方がはるかに良い生活、祝福された生活をしています。人間的にはそのように見えます。しかしこのヤコブの道こそ本流であり、真の神の祝福を受ける道であることを聖書は語ります。時間はかかりませんが、こちらこそ永遠の祝福に通じる道なのです。このことはこの世における成功や祝福より霊的な訓練を受けて真の祝福に至る道の方がはるかに時間がかかることを暗示します。このプロセスを通してヤコブとその子孫はまことの神の民としての祝福にあずかるように整えられて行くのです。へブル人への手紙 11 章 13 節にはアブラハムら族長たちを指して、こう言われています。「これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。」そして 16 節にこう言われています。「彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんで

した。神が彼らのために都を用意されたのです。」 ヤコブとその子孫は神の約束に従って、なお忍耐をもって待ち望み、その信仰の歩みを通して訓練され、聖められ、成長させられ、ついに神が約束された天の都、永遠の御国に入るように導かれます。ヤコブはこちらの祝福の道を進みました。その彼の歩みがこの後、37章2節以降でなお詳しく記されて行くこととなります。

今日の箇所を読んで私たちに問われているのは、果たして私たちはどちらの道を行くのかということでしょう。エサウ的人生を進むのか、それともヤコブ的人生を進むのか。エサウのようにこの世的には祝福されたけれども永遠の観点からは何も残らないという人生でありませぬように。彼の生活には神への信仰を感じさせるエピソードは一つもありませんでした。たとえこの世で成功し、繁栄したとしても、そこに「神」の一語もない残念なもので終わることがないようにと戒められます。そうではなく私たちはヤコブのように神の約束を見つめ、神の御言葉にとどまる生活を求めたいと思います。今すぐの祝福はないかもしれませんが。なお忍耐を強いられるかもしれません。しかしこちらの道こそ真の祝福に通じている道です。私たちの地上の数十年の歩みは永遠の祝福に至るための準備行程のようなものです。その真のゴールとそこにある祝福を一心不乱に見つめて神に従う人こそ、アブラハム、イサク、ヤコブら族長たちの足跡に倣う信仰の民、まことの神の民です。そのような者たちに神は約束のもの、天の都、永遠の御国を用意してくださるのです。